

益を野生生物保護対策に充当する構想を発表していた。しかしながら、新任の観光・野生生物大臣が一九八九年十月のワシントン条約締結国会議でアフリカ象の象牙取引の全面禁止を主張すると五月に公表した直後に、象牙の競売が実施されたために、真意を疑うと野生生物保護論者から相次いで非難されることになった。その対応として、象牙焼却の「儀式」が催されたのである。アフリカ象保護の主導権を握ることによって、幻の象牙収入に数倍する野生生物保護財源を国外から確保しようとの読みがあったといわれる。

象牙焼却を一樣に賞賛するケニヤの政治家、高級官僚のインタビュー記事に、かえってケニヤ政治の不安定さを感じるのには杞憂であろうか。

(池野 旬)

コートジボワール ◎ 害なわれた潟湖の景観

西アフリカのギニア湾の海岸線は、ラギューン(潟湖)が入りくんでいることがその特徴である。このギニア湾に面したコートジボワールの経済的主都アビジャンも、このラギューンが入りくみ、水の都といった美しい景観をこの都市に与えている。植民地時代の末期、一九五〇年にウ

リディ運河によって外海とこのラギューンを接続し、アビジャン港は西アフリカ有数の良港として開港した。この運河の開通によって、外海の塩分の濃い海水がラギューンに流れこんだとき、ラギューンでは、環境の激変から万余の魚が死に水面に浮きあがったという。開発のもたらした環境破壊のはしりであったともいえよう。しかしこのヴリディ運河の開通、アビジャン港の開港は、その後のコートジボワールの高度経済成長の直接的契機となった。アビジャン港から、木材、ココア、コーヒーなどが続々、船積みされ輸出されることによって、一九七〇年代末まで、コートジボワールは「ミラクル・イボワリアン（象牙の奇跡）」といわれたほどの高度経済成長を二〇年間以上にわたって持続したのである。

この高度経済成長にともなうアビジャン市も急速に発展する。一九六〇年当時、人口わずか二五万にすぎなかったこの都市は、今日、人口二〇〇万をこえる西アフリカ有数の大都市に急成長を遂げた。市の中央に林立する高層ビル群は、この高度成長の象徴である。

一九八三年、アビジャン市長の提案で、首都をアビジャンから内陸のヤムスクロに遷都する法律が国民議会で可決されたが、その提案理由の一つには、生活用水の供給、排水の処理、都市交通、住宅などあらゆる面でアビジャン市は機能マヒ寸前の状態にあることがあげられていた。もちろん遷都の最大の理由は、今や国父的な地位を獲得したウフェ・ボワニ大統領の生地、ヤムスクロに首都の称号を与えるという政治的なものであったと思われるが、人口がこれだけ急激に増大すれば、都市機能の拡充がそれに追いつかないのも当然である。

その一つにゴミ処理の問題がある。アビジャン市を出て植民地時代の首都バンジエールヴィル

に向かう自動車道路は、完全舗装の片道二車線、道の両側には、整然と等間隔に植えられたオイル・パームの林が続く。この道をドライブしているとこのすばらしい景観におよそふさわしくないゴミを満載しノロノロ走るダンブ・カーを何台か追い抜かすことになる。そのダンブ・カーはアビジャン市から数キロほどのところで、左折して視界からきえる。このダンブ・カーは、ラギューン沿いの原野に設けられた市のゴミ捨て場に向かうのである。ダンブ・カーで運ばれて、そこでおろされたゴミの山は、トラクターで平らにならされているだけである。当然のことながら、熱帯雨林のしめった空気に異様な香りをつけ、付近に立つとムツとする。しかし、その異臭の中で作業している市の職員もいれば、ゴミの山からなお少しでも価値あるものの採取にはげんでいる人もいる。そして、彼らの昼食をせっせと準備しているめし屋のおばさんたちもいる。アビジャン市を囲む原野にはまだ余裕があつて、このようなゴミ捨て場をどこに開設するかということよりも、現在のところ問題になっているのは、市内の各所からこのゴミを集めこのようなゴミ捨て場まで運んでくる費用の問題である。経済不況の最中、またアビジャン市当局にとっては、大きな問題となっている。

しかし、ゴミはこのように市の景観を害なわなないように、人の目につかないところに運び去られているかぎり、一般市民はそのことを意識しないですむ。ところが、近年、だれの目にもはっきりわかるかたちで、アビジャン市の生活環境が悪化しつつあることを示す現象があらわれはじめた。それは、ラギューンにおける浮き草の異常発生である。

熱帯の太陽の威力のせいか、その繁殖力はまことにすさまじく、かつてはアビジャンの華麗な

高層ビル群の夜景を映し浮かべていたラギューンの水面を、雨期明けの季節になると緑一色のカーテンで覆ってしまうのである。そして、この浮き草は、ラギューンの水上交通、漁業、灌漑、水力発電などにかんがりの被害を与えることになった。その一つの要因は、アビジャン市の発展にともない、増大する生活排水が、処理されることなくそのまま大量にこのラギューンに流し込まれているためである。ラギューン沿いの自動車道路を走っていると、硫化水素の異臭が鼻をつく箇所がある。

この浮草の異常発生は、コートジボワールだけではなく、同じような地形をもつガーナ、トーゴ、ベニン、ナイジェリアなどギニア湾沿岸諸国で一様におこっているという。そこで、一九八八年十月、ここアビジャン市で、この問題を討議する国際セミナーがECOWAS（西アフリカ諸国経済共同体）の主催で、関係各国、FAOなど諸国際機関の専門家たちを招集して開催された。

これまで各国がその対策として講じてきた措置は、およそ三種類に大別できる。

その第一は、異常発生した浮草を物理的に排除するというもので、アビジャンでも当初、この方法を採用したが、浮草の繁殖の方がはるかに早く、失敗に終わったという。

第二の方法は、除草剤の散布である。これはかなりの効果をもたらしているが、除草剤に含まれている化学物質が、長期的にラギューンの動植物の生態系にどのような影響をもたらすかという不安があるという。

第三は、この浮草の発生に対抗できる昆虫や、水草を導入するという方法である。すでに米国

のフロリダ、オーストラリアなどで実験され、その有効性が確認されている *Nechetia* や *Echhornia* などの導入が、実験的に始められている。これは第二の方法より、生態系の破壊という点では危険性は少ないが、それでもその導入が単に浮草ばかりではなくその他のラグーンの植生にたいしてどのような影響を及ぼすことになるか、検討の余地はあるという。

コートジボワールでこれまでに成功をおさめている方法は、浮草発生を局地的に限定するための浮き堤防の設置、外海への出口の浚渫工事によってラグーンの水の循環を促進するなどの措置である。

●破壊される自然環境

都市の環境問題は、コートジボワールにとっては比較的新しい問題であるが、もっと根深い問題として熱帯原生林の激減、それとも関連する象の絶滅の問題がある。

過去五〇年間に、コートジボワールの原生林は、一〇〇〇万 ha から三〇〇万 ha に激減したと推定されている。これは、木材の伐採、ココア・コーヒーなどのプランテーションの造成が主な原因なのである。

近年、コートジボワール政府は、木材の伐採を規制し、植林事業を奨励し、一九八八年は「植林の年」として、全国的に政府主導のキャンペーンを行った。しかし、何万年もの年月を経てつくられた原生林の再生力は弱く、今のところ、政府のこうした努力も焼石に水といった状態らしい。

原生林減少のもう一つの原因であるココア・コーヒー・プランテーションの造成については、一九八九年初めコートジボワール政府は、ついにココア・プランテーションの今後の拡張を禁止するという方針を決定した。もっともこれは環境保全の観点から講じられた措置ではなく、ココアの国際市況の低迷という経済的理由に発している。

次いでコートジボワール政府は、十月から始まる一九八九―九〇年度のココア、コーヒーの買付け、集荷に際して、ココア、コーヒーの生産者価格をこれまでの半額、それぞれキロ当たり二〇〇CFAフラン、一〇〇CFAフランに一挙に切り下げると発表した。これによって独立以来、東南部にはじまってしだいに西方に向かって原生林を浸食してきたココア・コーヒー・プランテーションの造成の勢いは鈍化することになるかもしれない。原生林の保全という点からみれば望ましい事態かもしれないが、現金収入が一挙に半減することになったココア・コーヒー栽培農民にとっては、きわめて深刻な事態である。

最近、国際的な論議の的になっている象の絶滅の危機という問題についていえば、コートジボワールという、日本語に訳せば「象牙海岸」となるフランス語の国名をもつこの国のこと、無関係ではすまされない。コートジボワール国内に一九五〇年当時は一〇万頭、生息していたとされる象は、その後毎年三〇〇〇頭の割合で減少し、今日なお生き残っているのは、わずか一五〇〇頭ぐらいと推計されている。それでも西アフリカで最大の象棲息国である。最近、西アフリカの沿岸部を貫通する国際自動車道路の建設に際して、コートジボワール西部のこの道路の建設予定地が、数少なくなった象の棲息地を通過することが判明し、関係者は路線の変更をしたものかど

うか、頭を痛めているところである。

●汚染肉はヨーロッパから

以上のような環境問題にことかかないこの国に、最近さらにヨーロッパからも問題をもちこまれて、当局者たちはおおわらわである。

去る一九八九年九月、アビジャン港に陸揚げされた八〇トンのコンテナ入り冷凍肉が、例のチエルノブイリ事故の放射線汚染肉であることが発覚したのである。これはオランダで船積みされ、仕向地は隣国のガーナで、アビジャンで陸揚げしてガーナまでは陸送の予定であったらしい。幸い事前に情報を入手していた当局の警戒の網にうまくかかったからことなきを得た。こんなことが続くと、スーパーマーケットで“importée”(輸入品)という二倍の価格に値するレットルの価値は下落し、“locale”(国産)がのしあがることになるかもしれない。

「黒人には生きる権利はない。彼らは地獄に送り込むしかない。全くたやすいことだ。……われわれに腐った肉——とりわけ放射能で汚染された肉——を喰わせること、われわれには害はないというのだ。彼らはなんと親切であることか。……われわれはすでに西欧の大企業の工業廃棄物を吸い込めといわれたことがある。……白い文明は汚れた手をもっている。黒い、黒人よりもっと黒い。……」(『イボワール・ソワール』紙 十月五日号)と叫びたくなるような状況にコートジボワールはおかれているのである。

(原口 武彦)